



横浜市立田奈小学校 学校だより

平成28年10月31日

11月号



みのたなくん

<http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/tana/>

校長 二瓶 光代
Tel 045-981-0009

本物体験から生まれる考え

校長 二瓶 光代

「気持ちいい・・・。」「わらの上に寝転びたい、ハイジはわらの上にシーツ敷いて寝てたよね。」こんなつぶやきが聞こえてきました。青く高い空、わずかにそよぐ風、柔らかな陽の光、わらのおいを体全体で味わいながら、脱穀してもままだもみがついている穂をわらの中から探している子ども達の会話です。10月14日好天に恵まれ5年生は、稲からもみを取る作業(脱穀)を行いました。稲は、天日干しによる自然乾燥の稲です。連日雨が続く中、稲の乾燥具合が心配でしたが、無事に脱穀の日を迎えることができました。協力者の方は毎年大きなコンバイン(現代の収穫機械)を田の中に入れ稼働して下さっています。コンバインであつという間に稲穂から外されたモミが、備え付けの大袋にみるみる溜まっていく様子を目の当たりにして子ども達は歓声をあげました。この日は、1時間ほどで130キロ以上のモミを集めることができました。

去年、協力者の方はコンバインの他に、竹を加工して歯にした千歯こき(昔の脱穀用農具)を持って来て、子ども達に体験させてくださいました。そして、今年には実物の千歯を見つけに来て、それに台木を取り付けつけ完成させた千歯こきを持って来てくださったのです。千歯こきによる脱穀を体験して子どもたちが気付いたことは、唐箕(もみとわら屑を分ける農具)は、絶対に必要な道具だということです。



みのたな博物館のジオラマ(千歯こき)



みのたな博物館のジオラマ(唐箕)

扱いに慣れていないとはいえ、千歯こきで脱穀すると想像以上にもみの中にわらが混ざってしまうのです。手作業でわらを取り除くのは、時間のかかる作業でし

た。またコンバインは一瞬でもみが落ち、袋に貯まっていくのに対し、千歯こきは、もみが歯にたまったり、いろいろな方向に飛び散ったりすることにも気づきました。

これらのことから、子ども達は、稲を脱穀するという工程ひとつとっても気の遠くなる作業の積み重ねがあったことを想像することができたのです。本物体験から、みのたな博物館のお宝（唐箕）の必要性、先人の苦勞と工夫、現代の機械の便利さを考えることができた一日となりました。子ども達のこのような深い学びを支援して下さった水田協力者の方々、保護者の方々に深く感謝申し上げます。